

■いつ死んでも物凄く損をしたというほどの年齢ではないのだ。

七月六日に作家の森瑤子さんがガンで死去された。五十二歳だった。私は直接面識はなかったが、その若さが痛ましくてならなかった。有吉佐和子さんが五十三歳で逝かれたことが思い出された。森さんは五十二で、有吉さんは五十三で亡くなった。私は五十四まで生きたために腰痛にぶつかってしまった。そう考えると、なぜか気が軽くなった。その反応をジッと分析してみると、自分ももういつ死んでもいいのだ、いつ死んでも物凄く損をしたというほどの年齢ではないのだというような、妙な解放感に繋がっているのだった。

■「誰もおまえを治せない。治すのは自分自身なんだよ」——面と向かって言える言葉ではないのだが。

二歳上の夫は、彼自身学生時代から椎間板へ

ルニアと付合ってきたせい、最初のうちはたかが腰痛と見くびっていたようだ。

「おまえが今まで小説の中でさんざん人を殺したその霊が腰にとりついているんだよ」

などと笑っていたが、私の苦痛と精神的な落ち込みがかなり深刻だと気がつく、ようやく正面から向かいあう姿勢になった。

(中略)

そして彼は、決まって最後に付け加えた。

「人間は生まれる時も独り、死ぬ時も独り。僕らはいくらでもサポートするが、誰もおまえを治せない。治すのは自分自身なんだよ」

■モルヒネも効かない痛みって…

この硬膜外ブロックはペインクリニックで使われている方法で、ともかくも痛みをとるための究極の手段と聞いていたが、それすら私には効かないことが実証されてしまった。

(中略)

「あなたの腰痛にはモルヒネも効かないだろう」と良永先生がいわれた。

「末梢神経ではなく、脳が痛がっているんですよ」

■カルテ

症例・出光静子・主婦・57才

(夏樹静子)(作家)

主訴 腰背部痛、座位立位の保持困難、倦怠感

病名 心因性疼痛障害(心身症)

■怒りと痛み

「それにしても治療者を攻撃するエネルギーも相当なものですね。そのエネルギー夏樹静子をはがむしゃらに働かせてきた原動力でしょうし、また痛みの根元でもあるのです。エネルギーの強い人ほど痛みにも敏感だし、怒りと痛みには密接な関係がありますからね。そりゃあ、さぞ痛いだらうと思いますよ」

そこで怒りを発散させれば痛みも出ていくものなのか、またしても奇妙な現象が発生した。先生に抗議しているうちに、また波が退(ひ)くように痛みが消えていったのだ。「偶然ではありません。カタルシスが行われているのです」